

風のように

甘木教会

主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一



善惡の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。 創世記2：16

すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

マタイによる福音書4：10－11

【説教要旨】

私は草花が好きです。これ、何の花と思うとスマホをかざして写真をとるとすぐに花の名前を教えてください。昔は植物図鑑を見て、捜し、それでも十分に知ることは出来ませんでした。しかし、今は一瞬にして知識を得ることが出来ます。

「善惡の木」とあります。「善惡の木」とは、ヘブル語の用法では「すべてのこと」を示す言葉です。「善惡の知識の木」ということは、「すべての知識」ということになるのです。神は私たちの持ちうる知識に限界をおかれたことが分かる。

そして人が「すべての知識」を持ったとき、「食べると必ず死んでしまう」と言われるのです。

現代社会に人類が誕生して以来、最も「知識」を人は容易に手に入れているのではないのでしょうか。人類史にとっては、これを発展と言ってきました。それを誰もが疑ってこなかったと思うのです。今や人間の遺伝子はすべて解明され、クローン人間も作ることが可能に近づきつつあるのです。ある意味で、私たちは「善惡の知識の木」、「すべての知識」の実を食べることができる、そんな時代に突入しているのです。

トルストイの民話に「人間にはどれほどの土地が必要か」という話があります。農夫パホームは、「広い土地さえあれば

悪魔でさえ恐くない」と言うのです。これを聞きつけた「悪魔」は策略を巡らすのです。そしてパスキール人のところに行けば、欲しいだけの土地は買えるというのです。彼はパスキール人から日の出から日の入りまでに歩けた土地が彼のものだと言われます。欲にかられた彼は歩き歩き、走りに走って出発点に帰ったとき足が崩れ、倒れ、血を吐いて死んでしまいます。彼を葬るに必要な土地は、僅かな土地だったという物語です。

この物語を思い出し、笑えないのです。私たちに必要な知識はいかほどいるのでしょうか。

この物語を私たちが笑えないほどの今、躓こうとしているところにいるのではないのでしょうか。今こそ、危機に直面している時代もないのです。

先に紹介しました「神は私たちの持ちうる知識に限界をおかれたことが分かる。」聖書の解説にあるように私たちは、このことに気づかなければならないと思うのです。

私たちが得た知識は本当に尊いものであります。知識保護ということ、知的財産ということが尊ばれています。だから一層、私たちは得た知識を誇示し、自己満足、欲のためにますます知識を得るために汗をかいています。しかし、「私たちが持ちうる知識の限界」ということに気づかなければ、農夫パホームのような真剣にして、滑稽な運命しかおくられないところまできているように思えます。

かつて、アフリカを代表するように開発途上国のエイズの問題は、大きな国際問題となっていました。高いエイズの治療薬を使えない貧しいこれらの国は、いわゆるその治療薬を真似た、そして同じ効き目のある薬を使うとしましたが、知的財産権保護のために、その薬が使用できなくなったということがありました。人の病気を治すことが薬を知的財産保護ということによって、使えない。本末転倒が起きています。知識が経済に組み込まれて商品化していくとき命は軽く足わられていくのです。

「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」という言葉を実感します。

私たちは、「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」という囁きを聞く、こういう厳しい試練の内に現代、私たちはますます置かれています。

だから、私たちはこういう時だからこそ、「食べてはならない」という神のみことばに聞いていかなければなりません。「すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ』／と書いてある。」「というように神に聴き、従っていくことが求められているのです。

宗教が本当に求められている時代は今ほどないのです。なぜなら知識は益々、人は魅力しくいくでしょう。知識を得ることによって、今日のイエスさまの試練を受け、退けた、権力、富、全ての者を手入れることができる世界が私たちの目の前にあります。そして、知識を手に入れるはごく一部の人であるということです。それが現代社会なのです。しかし、これは人類を死へと導く悪魔の誘惑です。農夫パホームのように欲に囚われる時すなわち、知識を際限なく得ようとする、最後には原爆のスイッチを押しかねないのです。「**善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。**」という神の声に耳を向けなければなりません。

ルターが「人間の本性は盲目であり、自分の力、いや自分の病をしらない。そればかりかもっと傲慢になって、自分がすべてを知り、すべてをなしうると思っている。このような傲慢と無知を救うために、神は律法を課す以外の効果的な治療をお用いになることができない。・・・・・・エラスムスの「評論」は、人間が完全で、健康だと夢想している。・・・・しかし、聖書は、人間は堕落し、囚われているもの、だが傲慢にも、自分の堕落と囚われを軽蔑し、気づかずにいるものと定義している。（奴隷意志論）」と言うように、人はこのような者であり、今の時代だから、主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。創世記 3：1」という誘惑に負けないことです。

牧師室の小窓からのぞいてみると



大変化していく時代に私たちは漠然とした不安にあ
思考能力を失いつつあり、世界が崩壊していく音を聞きます。

こういうとき時代に抗うことも一つの生き方でしょうが、神の「静まれ」という声が聞こえてきます。

今、信仰の足元を深く掘るときではないでしょうか。静まって聖書と向かい合う時だと思います。時代にもがくときでなく、み言葉に聞き、祈る時だと思います。

今こそ教会が、み言葉、祈りの場となる時です。ここから時代に抗うのではなく、時代と戦うエネルギーが生み出されるのではないかと信じます。

園長・瞑想？迷走記



私、園長のもう一つの顔は、保育園の牧師で、子ども
礼拝、教職員への聖書講話をしている。大半がクリスチャンではない。教会の内にだけ分かるような言葉を用いず、日常の言葉を用いて話す努力をしている。

今月のキリスト教保育の聖句は「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。ヨハネによる福音書 4:11」である。ここで、神さまの愛って何だろうかと聞く人に問いかけます。渡辺和子氏の「心に愛がなければ」の本の中にある「神の愛」を昔の宣教師が翻訳した「デウスのごたいせつ」について話します。「神がこのようにわたしたちを愛された」を「神さまがこのように私たちを大切にされた」と伝えます。

能力があるかどうかで、一人一人が差別化されていく中で、現代、教育現場で、一人一人がかけがえのない一人としてたいせつな人なんだよと伝えていきます。

キリスト教幼児教育の現場にいる次男が、「自分を支えている聖書の言葉は父がいつも言っていた『神は愛』という言葉です」と言った言葉に、「そうだ、そうだ」と頷きました。

日毎の糧



聖書：あなたの慈しみに生きる人は皆、あなたを見いだする間に、あなたに祈ります。

大水が溢れ流れるときにも、その人に及ぶことは決してありません。
あなたはわたしの隠れが。苦難から守ってくださる方。

救いの喜びをもって、わたしを囲んでくださる方。
わたしはあなたを目覚めさせ、行くべき道を教えよう。

あなたの上に目を注ぎ、勧めを与えよう。
神に従う人よ、主によって喜び躍れ。すべて心の正しい人よ、

喜びの声をあげよ。 詩編 32:6—7, 11



ルターの言葉から 慈しみに生きる人

この詩はキリスト教会では「悔い改めの詩篇」として大切にされた。（詩篇 6, 32, 38, 51, 102, 130）

見よ。これは十字架の道である。これをあなたは見いだすことができない。しかしわたしは、目の見えないあなたを導く。だからあなた自身によってでもなく、人間あるいは被造物によってでもなく、わたしのことばとみ霊によって、あなたの歩むべき道を教える。あなたは自分の選んだ仕事に従事せよ。苦しみは、あなたが意図したものではなく、あなたの選択、思い、計画に反して来るものである。わたしがあなたを召すのはその所である。そこでは、あなたは聖徒でなければならない。それには時がある。あなたの主は、そこであなたのものを訪ねる。

『マルティン・ルター日々のみことば』鍋谷堯爾編訳 いのちのことば社)

関根氏は次のように結ぶ。「キリストを信じる者は徹底的に罪赦され、この世から引き出され聖徒とされる。しかし新約の聖徒は旧約の『敬虔な者』とは異なる。彼は一方的に自らを完全にこの世から異なるものと見ると共に他方徹底的に自らを世の罪人の低きに置くのである。それが十字架の愛であるからである。自己に異質的なものの一切を排除した信仰の純粋のみを強調して愛を忘れる者はまだ福音の心を知らないものではなかろうか。」①

引用文献：① 詩編注解上

関根正雄 教文館

祈り：主の十字架を見つつ、神の慈しみを感謝して、慈しみを生きつつ、喜びをもって讃美できる者としてください。アーメン。

甘木通信

コヘレトは言う。なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい。太陽の下、人は労苦するが、すべての労苦も何になろう。コヘレト1：2



変わらないのは、神さまの存在、神の愛だと歳をとるとつくづく感じるようになりました。

「ドストエフスキーの『罪と罰』の中に象徴的な場面があります。世界の不条理に耐えられず、それゆえに犯した罪（殺人）さえ正当化しつづける主人公ラスコーリニコフに恋人ソーニャは言うのです。『大地に接吻し、赦しを乞いなさい』。抗っていたラスコーリニコフが物語の終わり近く、大地にひざまづき接吻します。不条理に身をもって抗しつづけることが生きる証しだと考えていたラスコーリニコフが、自分を受容し生かしささえている大地（神）の存在に気づかされるのです。

そんな転換点が人生にはあるのではないか、と思います。人が年を重ねるということはそういうことではないか、と。（55歳からのキリスト教入門 イエスと歩く道 小島誠志 日本基督教出版局）

「一代過ぎればまた一代が起こり 永遠に耐えるのは大地。コヘレト1：3」。ブラジルで生活し、不条理なことを日々、目にしてきた。その不条理をそれ以上に抱き込む大地の豊かさに慰められた事か。不条理を正すと粹がることの空しさ、すべてを耐え、受容してくれる大地に立っている慰めに励まされ、生きる力をいただいた。転換点（ターニングポイント）がブラジルで、今もブラジルの大地を思い出すことにしている。

（甘木日記）土）雨。甘木教会へ。「キリスト教講座—アブラハム物語」。老いには勝てず。一步も外に出ず。日）雨の後、温かい一日。礼拝後に紫のビオラを植える。月）早く幼稚園に行く。事務的仕事をし、園児を迎える。午後から施設評価委員会。火）体調も良くなり、朝早く園に行き、最後に帰ってこられる。感謝。水）夜、灰の水曜日の礼拝。イエスさまの十字架を偲ぶ日々の出発。木）松崎保育園での聖書の学び、子ども礼拝、甘木教会で少し草取り。金）主任が午前中いないというので7時20分には幼稚園に。一週間、楽しくよく本を読んだ。読書は楽しい。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
はぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）雨の降らないうちに午前中に甘木教会へ向かう。「キリスト教講座」。創世記緒論、アブラハム物語を「70歳からのキリスト教：聖書でたどる人生の旅 大澤沢秀夫 日本基督教団出版局」を資料として話す。今週は東京で仕事、久留米では遠足の付き添いと老いには勝てず、雨を理由に一步も外に出ず。本を読み、落語を聞いている。家内には煩そうである。清寿軒のどら焼きは木曜日に来ると息子から電話。日）雨の後、暖かい一日となる。ポインセチアを地植え、紫のビオラを植える。庭をふとみると黄色の一輪の水仙が開花。月）早朝、幼稚園に行く。一番かと思ったら既にY先生が来られていた。事務的仕事をし、通学途上の子ども、卒園児と朝の挨拶しながら、園庭掃除をし、園児を迎える。午後から施設評価委員会、そして、最後に書道の先生と話をして、最後に園を出る。体調も回復しつつあるのだろうか。いつものことが出来るようになりつつある。「いつものこと」、これほどの恵みはない。妻のおかげ。「幼稚園に〇十万円を寄付するお金用意した？」と言うと「用意したよ」といつものことようにぽんと渡してくれる。心で妻に手を合わせる。しかし、相変わらず口喧嘩は続く。（笑）ごめん。「僕が先に天に帰っても、ゆっくり来てください」と。火）またぶり返すかという不安はいつもあるが体調も良くなり、朝早く園に行き、最後に幼稚園を出て帰ってこられる。経営コンサルタントとの話し合い。思った通りの報告だったが、筋を立てくれることは助かる。

水）見学に来られる方が来なかったと報告。なかなか難しく、残念である。昼休み、花緑さんの独演歌のチケットを購入に行く。残っていて良かった。幼稚園で職員会議が終わり、すぐに、夜、灰の水曜日の礼拝で甘木教会へ。イエスさまの十字架を偲ぶ日々の出発。帰りの夜、久留米まで信徒さんが送ってくださる。学校の仕事が終わって、礼拝に来られ送ってくださるわざに手を合わせる。木）松崎保育園の職員への聖書の学び、こども礼拝。『球根の中には』という讃美歌。こどもらに「先生、好き



なんだ。優しく歌って」とお願いする。甘木教会にくるとクリスマスローズの花が咲いている。嬉しくなる。東京から清寿軒のどら焼きが届いていた。さっそく甘党の松崎保育園の園長に届ける。が、電車を乗り間違い、迷惑をかける。老いた老いた。今週は軽い本ばかりを読んでいた

が、結構勉強になった。金）主任が午前中、休みで7時に家を出て幼稚園一番乗りして準備。清寿軒のどら焼きを職員に渡す。老いた、老いた、残る日もないと感じる一週間。さて思案。

